

フィロンの愛の教説：パウロの教説との比較検討

原 口 尚 彰

1. 問題の所在
2. 語学的分析
3. 主題的分析
 - 3.1 神の愛と神への愛
 - 3.2 隣人愛
 - 3.3 友愛
 - 3.4 人類愛
4. 結論

1. 問題の所在

アレクサンドリアのフィロンの愛に関する発言には、旧約・ユダヤ教的要素とギリシア的・哲学的要素とが混在しており、研究と解明を必要としている。近年、初期キリスト教の友情論へ関心の高まりに伴い、英語圏の研究者を中心にフィロンの友情論についての研究が発表されるようになった¹。しかし、友情論は以下の論考が示すように愛についての教説の一部を構成するに過ぎない。フィロンの愛についての教説全体を見渡した先行研究は存在せず、本格的な分析と考察は未解決の課題となっている。

本研究はフィロンの愛の教説についての語学的・思想史的考察である。特に、旧約・ユダヤ教の倫理教説どのように継承発展させたのかということと、ギリシア・ローマの倫理思想をどのように取り入れているのかということとを明らかにしたい。さらに、フィロンと同時代のキリスト教宣教師であったパウロの愛の教説と対比してその思想的特色を浮き彫りにしたい。パウロもまたディアスポラ出身のユダヤ人であり、ギリシア語で著作を残しているが、愛の教説については、以下に述べるようにフィロンとは全く異なった方向を示しており、興味深い比較の材料を提供している。

2. 語学的分析

フィロンは、愛の主題を七十人訳聖書の伝統に基づいて、agap-語群によって表現する一方で、ヘレニズム世界の伝統に従ってphil-語群やera-語群によって表現している。彼は動詞アガパオー (ἀγαπάω「愛する」) を65回²、名詞アガペー (ἀγάπη「愛」) を3回 (『神の不動性』69; 『出エジプト記問答』Ⅱ 21 [2回])

1 G. E. Sterling, "The Bond of Humanity: Friendship in Philo of Alexandria," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J. T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 203-223を参照。

使用している。動詞アガパオーは大多数の場合人が人を愛する行為について使用されているが、神がイスラエルの民を愛することや（『移住』60）、民が神を愛することに関して使用されている例もある（『子孫』12, 69; 『逃亡』58; 『神の不動性』69 [2回]; 『移住』21, 60; 『アブラハム』50; 『十戒各論』I 300）。

これに対して、フィロンは動詞フィレオー（φιλέω「愛する」）を62回³、名詞フィリア（φιλία「愛」、「友情」）を52回使用している⁴。動詞形についてはアガパオーとフィレオーの使用頻度はほぼ拮抗している。両動詞がほぼ同義で互換的に使用されている箇所も少数だが存在する（『相続人』42, 44）。

名詞形については、アガペーよりもフィリアの使用例が圧倒的に多い。この言語使用の特色は、パウロが愛に関しては専らアガペーを使用し⁵、フィリアを全く使用しないことと対照的であるが、ギリシア・ローマ世界の倫理教説における一般的な言語使用の傾向と一致する。古典文献においては、フィリアが社会生活における人間相互の愛を表す基本的語彙として好んで使用されており（ヘロドトス『歴史』7.130; プラトン『パイドロス』237c; アリストテレス『政治学』1242b; 1262b; クセノフォン『ソクラテスの想い出』2.6.29; イソクラテス『弁論集』1.33; 6.11他多数）、アガペーの使用頻度は高くない⁶。

フィロンにおいて名詞フィリアは友愛を指して使用される場合が多く（『律法書の寓意的解釈』II 10; III 182; 『供物』36; 『子孫』157; 『栽培』90, 104, 106 [2回]; 『混乱』48; 『相続人』21 [2回]; 『アブラハム』129 [2回], 194; 『十戒各論』III 155, 158他）、反対語のエクストラ（ἐχθρα「敵対」、「敵意」）と対で出て来ることもある（『十戒各論』IV 88; 『徳論』152）。他方、この名詞は親の子に対する愛や（『逃亡』40; 『アブラハム』194; 『ヨセフ』74）、子の親に対する愛（『十戒各論』II 240）について使用されることもある。さらに、この名詞は人間間の愛だけでなく、頻度は少ないが神への愛についても使用される（『逃亡』58）。

動詞エラオー（ἐράω「愛する」、「望む」、「欲する」）や名詞エロース（ἔρως「愛」、「情熱」）は、新約聖書には全く使用されていない。しかし、フィロンにおいて、動詞エラオーが46回⁷、名詞エロースが93回使用され⁸、愛を表現する重要な語彙となっている。名詞エロースはエピシュミア（ἐπιθυμία「欲望」）

2 『律法書の寓意的解釈』II 48 [3回]; 56; III 129, 176, 193, 198; 『ケルビム』72, 73; 『供物』19 [[3回]; 20; 『子孫』12, 69 [2回]; 『神の不動性』69 [2回]; 『栽培』105; 『酔い』84; 『覚醒』6, 21 [3回], 22, 23; 『混乱』41, 109; 『移住』21, 60; 『相続人』42, 44, 47, 49 [2回]; 127; 186; 『予備教育』31; 『逃亡』58; 114; 154; 『改名』225, 227; 『夢』I 95; 『アブラハム』22, 50, 87, 221; 『十戒各論』I 17, 300; IV 5, 23; 『徳論』103, 104他。

3 『創造』54, 103; 『律法書の寓意的解釈』II 99; III 251; 『農耕』158; 『栽培』105 [2回], 127; 『混乱』7, 115; 『移住』211; 『相続人』40, 41, 42, 44 [3回], 50, 265, 310; 『逃亡』113, 166, 179; 『夢』I 95; II 145; 『アブラハム』210, 228; 『ヨセフ』179, 182; 247; 『モーセの生涯』I 10, 33, 45, 138, 170, 220; 『十戒総論』125; 『十戒各論』I 119; III 99, 155; IV 51; 『徳論』24, 115, 225他。

4 『律法書の寓意的解釈』II 10; III 182; 『供物』36; 『混乱』48; 『相続人』21 [2回]; 42, 44, 51; 『逃亡』40, 58; 『夢』II 97; 『アブラハム』129 [2回], 194; 『ヨセフ』74, 210; 『モーセの生涯』II 171; 『十戒総論』89; 『十戒各論』I 52, 70, 112, 317; II 26, 119, 240; III 155, 158; IV 88, 161; 『徳論』35, 55, 109, 152 [2回], 179他。

5 ロマ5:5, 8; 8:35, 39; 12:9; 13:10 [2回]; 14:15; 15:30; I コリ4:21; 8:1; 13:1, 2, 3, 4 [3回], 8, 13; 14:1; 16:14, 24; II コリ2:4, 8; 5:14; 6:6; 8:7, 8, 24; 13:11, 13; ガラ5:6, 13, 22; フィリ1:9, 16; 2:1, 2; I テサ1:3; 3:6, 12; 5:8, 13; フィレ1:5, 7, 9。

6 詳しくは、LSJ 1934を参照。

と並べられて否定的に言及される場合もあるが（『律法書の寓意的解釈Ⅱ 72；『農耕』84；『ヨセフ』70）、知恵や（『創造』5, 70；『相続人』14）、知識や（『ケルビム』19；『酔い』159；『十戒各論』Ⅰ 64）、徳を求める愛（『農耕』91）として肯定的に言及されることもある⁹。知恵を愛することは、知識を探求する哲学的営みに他ならない。こうした用語法はエロースを男女の愛のみならず、善美なるものへの愛を表す言葉としても用いるプラトン哲学の影響を受けたものであろう（プラトン『リュシス』221e；『饗宴』181cd；201abを参照）。他方、フィロンにおいてこの名詞は、フィリアの同義語として並べて用いられることもある（『逃亡』58；『アブラハム』194）。この名詞が、神への愛を指して使用される例もある（『ケルビム』20；『逃亡』58；『アブラハム』170；さらに、『相続人』70；『モーセ』Ⅱ 67も参照）。フィロンの言語使用においてアガペーとフィリアとエロースの意味内容が一部重なっており、截然と区別することは困難である。

名詞フィラデルフィア（φιλadelphία「兄弟愛」）は、七十人訳聖書に3回（Ⅳマカ18:23, 26;14:1）、新約聖書に6回（ロマ12:10；Ⅰテサ4:9；ヘブ13:1；Ⅰペト1:22；Ⅱペト1:7 [2回]）、真正パウロ書簡に限れば2回用いられている（ロマ12:10；Ⅰテサ4:9）¹⁰。しかし、フィロンにおいてこの名詞は1回しか用いられていない（『ガイウス』87を参照）。

他方、フィロンは名詞フィランソロピア（φιλαθρωπία「親切」、「善意」、「友好」、「人類愛」）という言葉55回用いている¹¹。この言葉は七十人訳聖書では5箇所で使用されているに過ぎず、そのうちの4箇所は外典部分に属している（エステル8:13；Ⅱマカ6:22；14:9；Ⅲマカ3:15, 18）。この名詞は新約聖書には2回しか登場せず（使28:2；テト3:4）、真正パウロ書簡には使用されていない。同根の動詞フィランソロペオー（φιλαθρωπέω）やファイランソロペウオマイ（φιλαθρωπέυομαι）はフィロンの著作に出てこないが、形容詞のフィランソロポス（φιλάθρωπος）は36回使用されている¹²。

3. 主題的分析

3.1 神の愛と神への愛

フィロンは神を信じることの大切さを強調し、信仰は最上の徳であると繰り返し述べている（『相続人』

7 『創造』166；『律法書の寓意的解釈』Ⅱ 55, 59, 80；Ⅲ 63, 213；『相続人』241, 243；『逃亡』97, 146；『夢』Ⅱ 40, 120；『アブラハム』271他。

8 『創造』, 70, 77；『律法書の寓意的解釈』Ⅱ 72；Ⅲ 136；『相続人』14, 70, 269；『逃亡』58, 195；『アブラハム』65, 66, 170, 194；『モーセ』Ⅱ 67, 96；『十戒総論』151；『十戒各論』Ⅰ 44, 64；Ⅲ 44, 65, 70；Ⅳ 51；『徳論』8, 55, 112, 113他。

9 A. Nissen, *Gott und der Nächste im antiken Judentum. Untersuchungen zum Doppelgebot der Liebe* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1974) 431を参照。

10 詳しい語学的分析については、LSJ 1931；Bauer-Aland, 1712；H. von Soden, “ἀδελφός κτλ.,” *TWNT* 1.144-46；E. Plümacher, “φιλαδελφία κτλ.,” *EWNT* 3.1014-15を参照。

11 『供物』27；『栽培』92；『夢』147；『アブラハム』79；『ヨセフ』240；『モーセの生涯』198, 249；『十戒各論』Ⅰ 129；Ⅱ 63, 79, 104, 110, 141；『徳論』66, 76, 80, 88, 95, 121, 140他。

12 『創造』81；『移住』156；『逃亡』96；『アブラハム』22, 137, 203, 208；『モーセの生涯』Ⅱ 9, 163；『十戒各論』Ⅱ 75；『徳論』28, 77, 97, 101, 106他。

90-95:『アブラハム』268, 270, 271, 273;『言葉の混乱』31;『モーセ』I 225;『賞罰』27-30,『徳論』49)。フィロンによれば、信仰とは神を愛し、神によって愛される関係に置かれることを意味している(『子孫』12;『アブラハム』50;『モーセ』II 67)。主はイスラエルを構成員の数によらず、愛するが故に選び、その民とした(『移住』60;さらに、申7:7-8を参照)。イスラエルの民にとって生きることは、活ける神を愛することにおいて成り立っている(『子孫』12, 69;『逃亡』58;さらに、申30:20を参照)。

旧約聖書において、神を愛することと(申6:5; 10:12-13; 11:1; 30:6, 16, 20)、神を畏れることは(申10:12, 20;詩22 [21]:24; 33 [32]:8;112 [111]:1; 箴1:7; 3:7; 24:21; イザ29:23他)、相互に比較されることなく並置されている。特に、申命記では、神を愛することと神を畏れることが、神の律法を守る動機付けとして交互に出て来ている(申10:12-13, 20; 11:1を参照)¹³。同様に、外典文書であるシラ書において、神を信じる者は、「主を畏れる者たち」または「その方(=主)を愛する者たち」と呼ばれ、両者はほぼ同義で使用されている(シラ2:15-16)。主を愛する者たちは、その道を歩み(2:15b)、律法を守るとされる(2:16b)。しかし、フィロンは両者の間を比べて、神の律法を守る動機付けとしては神を愛することをより望ましいこととして推奨し、それに至らない段階では神を畏れることを勧めている(『移住』21;『十戒各論』I 300;『夢』I 162-163;『出エジプト記問答』II 21)¹⁴。

3.2 隣人愛

パウロは初期キリスト教の伝統に一致して(マコ12:31並行を参照)、旧約聖書の隣人愛の規定を(レビ19:18)、他者を愛することを勧める根拠規定として援用している¹⁵。十戒をはじめとする律法の倫理的な要求は結局のところ隣人愛の実践ということに尽き(ロマ13:9; ガラ5:14)、愛は律法を成就するとされている(ロマ13:8-10; ガラ5:13-14)¹⁶。

フィロンはレビ記19章18節の隣人愛の戒めの文言を直接引用はしていないが、モーセの律法に同胞を尊重する定めがあるという趣旨の発言をしている(『徳論』101-102)。彼はさらに、レビ記19章34節の記述を前提にして、神がイスラエルに対して寄留者を友や同胞と同様に愛するように命じていることを強調している(『徳論』103)。彼は寄留者たちが自分の土地を離れ、伝統的な神々への礼拝を捨て、唯一の真の神に帰依するに至ったからであるということ述べ、寄留者を改宗者のイメージで捉えている(『徳論』102)。フィロンは隣人愛の戒めを基本的には同胞愛の戒めとして理解するが、その対象を異邦人の改宗者にまで拡張している。同様な解釈は、ラビ・ユダヤ教文献にも見られる(シフラ・レビ記

13 Nissen, 197-201.

14 Nissen, 446-465は、主を畏れることから、愛することへと進むという観念に関して、フィロンがアガペーではなく、魂が神を求めて上昇するエロースの働きを想定しているとするが、この見解には賛成できない。フィロンは、この文脈では愛することを一貫して、動詞エラオーではなく、動詞アガパオーによって表現し、旧約聖書的理解に留まっているからである。

15 2 但し、共観福音書とは異なり、パウロは隣人愛の戒め(レビ19:8)を神への愛への戒め(申6:4)と組み合わせて引用していない。パウロはここで共観福音書とは別の伝承に依拠しているのであろう。

16 T. Söding, "Nächstenliebe als Erfüllung des Gesetzes - das paulinische Konzept," in *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015) 243-296; O. Wischmeyer, "Das Gebot der Nächstenliebe bei Paulus," *BZ* 30 (1986) 161-187を参照。

19:33-34を参照)¹⁷。

3.3 友愛

パウロは信徒たちへの倫理的勧告の中で、互いに愛し合うことを勧める（ロマ12:10；13:8；ガラ5:13；Iテサ3:12；4:9）。彼はフィラデルフィア（兄弟愛）という用語を用いることがあるが（ロマ12:10；Iテサ4:9）、フィリア（友愛）やフィロス（友）というギリシア・ローマ世界の倫理的議論の中で使用される標準的用語を用いることを避けている。

他方、フィロンは友愛の問題にしばしば言及し、様々な角度から論じている。フィロンによるとイスラエル人たちは民族同胞であるが、同時に互いに友である（『モーセの生涯』I 303, 307, 322；II 42, 171, 273）。フィロンは友愛を構成する本質要素を、意見の一致（『相続人』83；『十戒各論』I 70；『徳論』35）と交わりに見ている（『十戒各論』II 119）。こうした理解は、友とは価値観を共有し、一致した意見を抱く者であるとするギリシア・ローマ世界の友人論を反映している（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1167a；キケロ『ラエリウス・友情について』vi.20）。帝政ローマ時代の倫理思想家プルタルコスによると、真の友愛において重要なことは、徳と親密な交わりと有益さである（「多くの友を持つことについて」『モラリア』94B）。

ギリシア・ローマ世界の友人論において真実を語ることは重要な要素とされていた。友愛は功利的な目的から相手の機嫌を取る追従とは異なっている。共和政時代の文人キケロによると、賢人ラエリウスは相手には耳の痛いことであっても真実を率直に語るのが真の友人であることを強調した（キケロ『ラエリウス・友情について』xxiv.89-100）。他方、帝政時代の思想家プルタルコスによると、友は慎重に考えて選ぶべきであり（94C-E）、権力者におもねる追従と、真実を語る友情とは区別されなければならない（「似て非なる友について—いかにして追従者と友人を見分けるか—」『モラリア』48E-78E）¹⁸。友は真実を語り、自らの判断を分かち合う（『モラリア』53B；さらに、ルキアノス『トクサリス』5も参照）。真の友とは、常に賞賛してくれる者ではなく、良く吟味して、必要ならば、率直に意見を述べて過ちを正し、叱責してくれる者である（『モラリア』66A）¹⁹。

フィロンもまた真の友愛と阿諛追従を峻別し、後者を有害な悪徳の一つとして再三にわたり非難している（『律法書の寓意的解釈』III 10, 182；『栽培』106；『言語の混乱』48；『神のものの相続人』21）²⁰。彼はモーセを例にとって、真の友は真実を率直に語るものであるとしている（『相続人』21）²¹。

17 Bill. I 354を参照。

18 D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 98-100; E. N. O'Neil, "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J. T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 109, 113-122.

19 Konstan, 105-108; K. Scholtissek, "Eine größere Liebe als diese hat niemand, als wenn einer sein Leben hingibt für seine Freunde" (Joh 15,13) ," in *Kontexte des Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey / U. Schnelle; WUNT 175; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004) 420.

20 G. E. Sterling, "The Bond of Humanity: Friendship in Philo of Alexandria," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J. T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 206-207.

21 Sterling, 207, 209.

3.4 人類愛

パウロはロマ12:9-21において、共同体倫理である兄弟愛の教えの限界を越えようとしている。冒頭の「愛は偽りであってはならない」(12:9)という文章がこの部分を貫く視角を提供しており(Ⅱコリ6:6を参照)、それに続く様々な倫理的勧告の言葉は(ロマ12:10-21)、偽りのない愛に導かれた者が社会生活の中で取るべき具体的な行動を例示している。これらの勧告の一部は、キリスト教徒相互の関係について語っているが(12:9-13)、他の部分は異教徒を含むより広い範囲の人々との関係一般に妥当する勧めとなっている(12:14-20)。特に注目されるのは、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」という愛敵の勧めである(12:14)。応報の原理や相互性の原理を越えた愛敵の教えは、イエス特有の教えであり、他には見られない初期キリスト教のエートスを形成していた(ルカ6:27b-28; マタ5:44; ディダケー1:3を参照)。パウロは愛敵の教えを継承することを通して、共同体倫理を超える可能性を指し示している。

フィロンは名詞フィランソロピア(親切、寛容、人類愛)を神や人間の倫理性の描写にしばしば用いている²²。この名詞や同根の形容詞フィランソロポス(親切な、寛容な)はギリシアにおいて神の属性の形容として用いられたが(アリストファネス『平和』392-393; アISKYロス『縛られたプロメテウス』2.10-11, 28; プラトン『饗宴』189D他)、王や皇帝ら支配者の寛容さの形容に転用された(イソクラテス『演説集』5.114, 116; 15.133; 9.43; クセノフォン『キュロス王の教育』1.2.60; 1.4.1; 4.2.10; 8.7.25他)²³。さらに、この概念はより一般化されて、神に倣って人間が備えるべき徳と考えられるようになった。ギリシアの哲学者や修辞家はフィランソロピアを備えた人を称賛している(アリストテレス『ニコマコス倫理学』1155a; 『弁論術』1390a; 『政治学』1263b; 『アテナイの国制』16.2; イソクラテス『演説集』4.29; デモステネス『演説集』18.112; 20.165; 21.43, 48; 25.81; クセノフォン『ソクラテスの思い出』1.2.60)。特に、アテネ人の特性として、敵対する者に対してもフィランソロポス(親切)であるとされている(プルタルコス『政治家になるための教訓集』799D)。ローマ帝政期になっても人類愛を重視する傾向は変わらず、倫理思想家たちはフィランソロピアを人間の徳性の重要な要素と考えていた(エピクテトス『語録』3.24.64; 4.8.32; プルタルコス『ソロン』2; 『クレオメネス』32; 『スーラ』31.4; デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.98; 18.2.2)。

ヘレニズム・ユダヤ教文献は、ギリシア・ローマ世界の慣用に従ってこの言葉を神の属性の形容としても(ヨセフ『古代誌』1.24)、支配者の寛容さの形容にも使用している(Ⅱマカ6:22; 9:27; 14:9; Ⅲマカ3:15; 知12:9; アリステアス290; ヨセフ『古代誌』12.124)。アレクサンドリアのフィロンの著作においてこの名詞は、神が人間に対して注ぐ愛を表現している(『ケルビム』99; 『子孫』147; 『栽培』

22 このギリシア語名詞の語学的分析については、LSJ, 1932; *The Brill Dictionary of Ancient Greek* (以後、BDAGと略記), 2274-2275; Bauer-Aland, 1712を参照。

23 U. Luck, “φιλαδελφία κτλ.,” *TWNT* 9.107-111; E. Plümacher, “φιλαδελφία κτλ.,” *EWNT* 3.1015-1016; Nissen, 466-467; G. Downey, “Philanthropia in Religion and Statecraft in the Fourth Century after Christ,” *Historia* 4 (1955) 199-200; J. Ferguson, *Moral Values in the Ancient World* (London: Methuen, 1958) 102-105; C. Spicq, “La philanthropie hellénistique, vertu divine et royale (à propos de *Tit.* III,4),” *ST* 12 (1958) 173-174; 土井健司『救貧看護とフィランソロピア』創文社、2016年、9-10頁を参照。

92: 『夢』 147; 『アブラハム』 79; 『モーセの生涯』 I 198; 『十戒各論』 I 129; II 104; 『徳論』 80)。他方、フィランソロピアは、人間が備えるべき重要な徳性の一つとして正義や思慮や自制や善と並んで挙げられている(『供物』 27; 『改名』 225; 『ヨセフ』 240; 『モーセの生涯』 I 249; II: 『十戒各論』 I 129; II 63, 79, 110, 141; 『徳論』 51, 66, 76, 88, 95, 121, 140)²⁴。イスラエル人が律法を通して教えられている善悪を判断する基準として、フィロンは神への愛と徳への愛と人類愛を挙げている(『自由論』 83-84)。神を信じる人間は、神の徳性の模倣として人間を愛することを求められている(『十戒各論』 IV73)²⁵。しかも、人類愛の対象は同胞だけでなく、敵対する者たちにも及ぶ(『徳論』 82, 109-118)。フィロンはギリシア的なフィランソロピアの概念を導入することを通して、旧約聖書に由来する愛の教説を普遍化しようとしたと言える²⁶。同様に愛の教説を普遍化する傾向は外典文書の一部にも見られる。知恵の書はフィロアンソロピアという言葉を使用していないが、創造論の基礎の下に神の愛の主題を解釈し、神への祈りの言葉の中で、「あなたは存在するものすべてを愛し、創造したものの何もお嫌いになることはない」と述べている(11:24)。知恵の書は普遍主義的な傾向が強く、創造主の被造物すべてに対する普遍的愛を強調していると言える。他方、シラ13:15も、「生きるものはすべてその同類を愛し、人間もその隣人を愛する」と述べて、隣人愛をより普遍的な人間愛の文脈で解釈する方向を示している²⁷。

4. 結論

愛に関して専らagap-語群を用いるパウロとは異なり、フィロンは七十人訳の語法に従ってagap-語群を用いるだけでなく、ギリシアの倫理的議論の慣例に従ってphil-語群、era-語群も広汎に用いており、文脈に応じて多様な語彙を使い分けている。特に、新約聖書では限られた箇所しか出てこない名詞フィランソロピアが(使28:2; テト3:4)、フィロンの著作においては広汎に登場して重要な役割を演じている(『ケルビム』 99; 『アブラハム』 79; 『モーセの生涯』 I 198; II 9; 『十戒各論』 I 129; II 104; 『徳論』 80他)。

フィロンは旧約・ユダヤ教の伝統に従って、ヤハウェと民イスラエルの選びに基づく特別な関係に注目し(『アブラハムの移住』 60; さらに、申7:7-8を参照)、神の愛とイスラエルの応答という視点から論じる(『カインの末裔』 12; 『アブラハム』 50)。隣人愛の戒め(レビ19:18)を直接引用することをしていないが、その趣旨を前提にして、同胞と寄留者を尊重すべきことを勧めている(『徳論』 102-103)。

ヘレニズム教会を代表する宣教師・教会形成者であったパウロは信徒たちに対して、互いに愛し合うことや(ロマ12:10; 13:8; ガラ5:13; I テサ3:12; 4:9)、兄弟愛を強調した(ロマ12:10; I テサ4:9)。他方、パウロはイエスの愛敵の教を継承することを通して(ロマ12:14; ルカ6:27b-28; マタ5:44; ディダケー1:3を参照)、共同体倫理を超える道を指し示した。

これに対して、フィロンは旧約聖書の倫理思想を、ギリシア的な友愛や(『徳論』 21, 175)、人類愛(『ア

24 K・シェンク(土岐健治・木村和良訳)『アレクサンドリアのフィロン 著作・思想・生涯』教文館、2008年126頁を参照。

25 D. Winston, "Philo's Ethical Theory," *ANRW* II 21.1 (1984) 398を参照。

26 *Ibid.*, 398-400.

27 O. Wischmeyer, *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 164.

ベルとカインの犠牲』27; 『ヨセフ』240; 『モーセの生涯』I 249; 『十戒各論』I 129; II 63, 79, 110, 141; 『徳論』66, 76, 88, 95, 121, 140) の視点から再解釈することを通して普遍化し、旧約聖書の語るところがギリシア・ローマ世界の倫理思想の理想を体現するものであることを示そうとしていた。専ら教会の形成者・指導者として信徒たちに向けて教えを語ったパウロと、国際都市アレクサンドリアのユダヤ人世界を代表する思想家として、当時の思想界にユダヤ教の真理性を示そうとするフィロンは、立脚点の違いに対応して対照的な愛の教えを提示していると言える。

参考文献

本文・インデックス

- Borgen, P. / K. Fugseth / R. Skarsten, *The Philo Index: A Complete Greek Word Index to the Writings of Philo of Alexandria* (Grand Rapids: Eerdmans; Leiden: Brill, 2000).
- Cohn, L. / P. Wendland (Hg.). *Philonis Alexandrini opera quae supersunt* (7 Bde; Berlin: de Gruyter, 1962-63).
- Colson, F. H. / G. H. Whitaker, *Philo in Ten volumes* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1930).

二次文献

- Bindemann, R. von. *Philo von Alexandria-Über die Freiheit des Rechtschaffenen* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2016).
- Birnbaum, E. "Exegetical Building Blocks in Philo's Interpretation of the Patriarchs," in *From Judaism to Christianity: Tradition and Transition* (FS. Thomas H. Tobin, S.J.; ed. P. Walters; Leiden: Brill, 2010) 69-92.
- _____. "Philo of Alexandria," *NIDB* 4.512-513.
- Borgen, P. "Philo of Alexandria," *ABD* 5.337-339.
- _____. *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time* (Leiden: Brill, 1997).
- Carmichael, C. M. *The Story of Creation: its Origin and its Interpretation in Philo and the Fourth Gospel* (Cornell University Press, 1996).
- Clifford, H. "Moses as Philosopher-Sage in Philo," in *Moses in Biblical and Extra-Biblical Traditions* (ed. A. Graupner / M. Wolter; BZAW372; Berlin: de Gruyter, 2007) 151-167.
- Deines, R. / K.-W. Niebuhr (Hg.). *Philo und das Neue Testament* (WUNT 172; Tübingen: Mohr, 2004).
- 土井健司『救貧看護とフィラソロビア』創文社、2016年
- Frey, J. / U. Schnelle (Hg.). *Kontexte des Johannesevangelium* (WUNT 175; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004).
- 原口尚彰「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第45号(2007年)21-36頁
- 同「パウロにおける愛の教説」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第1号(2016年)21-42頁
- 平石善司『フィロン研究』創文社、1991年
- Konstan, D. *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997).
- McFarland, O. *God and Grace in Philo and Paul* (SNT 164; Leiden: Brill, 2016).
- Nissen, A. *Gott und der Nächste im antiken Judentum. Untersuchungen zum Doppelgebot der Liebe* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1974).
- O'Neil, E. N. "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J. T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 105-122.
- Runia, D. T. *Philo of Alexandria and the Timaeus of Plato* (Leiden: Brill, 1986).
- Ryu, J. *Knowledge of God in Philo of Alexandria* (WUNT II 205; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).
- Seland, T. ed. *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria* (Grand Rapids: Eerdmans, 2014).

- Schenck, K. *A Brief Guide to Philo* (Louisville, KY: Westminster-Knox, 2005)=K・シェンク (土岐健治・木村和良 訳)『アレクサンドリアのフィロン 著作・思想・生涯』教文館、2008年
- Söding, T. *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995).
- _____. "Gottesliebe bei Paulus," in idem., *Das Wort vom Kreuz* (WUNT 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1977) 303-326
- _____. *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992).
- _____. *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015).
- Sterling, G. E., "The Bond of Humanity: Friendship in Philo of Alexandria," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J. T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 203-223.
- 辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年
- Winston, D. "Philo's Ethical Theory," *ANRW* II 21.1 (1984) 372-416 (esp.391-400).
- Wischmeyer, O. "Das Gebot der Nächstenliebe bei Paulus," *BZ* 30 (1986) 161-187.
- _____. "Traditionsgeschichtliche Untersuchung der paulinischen Aussagen über die Liebe (ἀγάπη)," *ZNW* 74 (1983) 222-236.
- _____. *Von Ben Sira zu Paulus : gesammelte Aufsätze zu Texten, Theologie und Hermeneutik des Frühjudentums und des Neuen Testaments* (WUNT 173; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004).
- _____. *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).
- Wolfson, H. A. *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam* (2 vols; Cambridge, MA: Harvard University Press, 1962).
- Worthington, J. D. *Creation in Paul and Philo* (WUNT II 317; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009).

(はらぐち・たかあき)

フェリス女学院大学国際交流学部教授